



Title	山路愛山研究序説 - 「惑溺」と「凝固」その(四) (完) -
Author(s)	岡, 利郎; OKA, Toshiro
Citation	北大法学論集, 26(4), 101-130
Issue Date	1976-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16198
Type	departmental bulletin paper
File Information	26(4)_p101-130.pdf



山路愛山研究序説

— 「惑溺」と「癡固」その(四) 完結 —

岡 利 郎

目 次

- 一 生い立ち
 - 二 キリスト教（以上二五卷四号）
 - 三 明治二〇年代（二六卷一号）
 - 四 「史論」の世界（一部二六卷三号、以下本号）
 - 五 國家と個人
- 四、「史論」の世界（承前）

(三)

先にもふれたように、明治二〇年代の愛山「史論」には江戸時代を対象としたものが圧倒的に多い。それは一面において前章でみたような時代的背景にかかわると同時に、他面「武士の子」としての愛山の主体的関心にもとづいて

いた。しかも前節でみた如く、「史論」が過去の批評であると同時に現代の批評を含むものであるとすれば、「史論」の中に愛山の現状認識と批評を読みとることができる。いわば彼は「史論」を通して過去を認識すると同時に、現代を認識していたのであり、現代の認識と過去の認識とは相互に関連しあっていたのである。従って我々は愛山の「史論」から彼の「政論」を読みとることができる。その際注目すべきことは、愛山において、前述の如く史学は一方で「同感同情」にもとづく「追体験」の学であると同時に、他方「史学は科学なり。故に其中に因果の理法もなく、前提及結論もなく、一の法則をも、一の原理をも教へざるものは史学に非ず⁽²⁾」とされ、「国家発達の法則を研究すべき科学⁽³⁾」とされていたことである。そして愛山「史論」においてもっとも強調されたのは、前節で見たように、「世界は常に進歩するものなり。優勝劣敗なる進化の大法は遍在なり⁽⁴⁾」という進化論的「進歩」の「法則」であった。彼は「進歩の勢は封建の制度と雖も全く牽掣する能はざる⁽⁵⁾」ことを強調し、「近世物質的の進歩」を考察した。しかし問題は正にここに胚胎する。「文明」と「泰平」と「物質的進歩」の「法則」的帰結は、一体何であろうか。

「世の泰平に赴くと共に文明の曙光は輝けり。……文明の大潮は防遏す可らざる勢を以て進み来れり。而して元祿時代は正に其進歩の頂点に達したるの時なりき⁽⁶⁾」。「殺伐なる寛永武士は元祿に至りて花の如きものとなれり。無言、沈着、淳樸、剛健の風は一変して多感、多芸、善談、善謔、放縱、不羈にして豪華なるものとなれり。……斯の如くにして彼等は……泰平と物質的進歩とに酔へり⁽⁷⁾」。「然れども是唯光れる半面のみ。吾人をして、公平なる歴史を画かしむる為めに、此時代が有する他の半面を画かしめよ。言ふまでもなく、此時代は氣力ある時代なり。国民の生活が進歩せし時代なり。国民の智性が覚醒せし時代なり。而れども不幸にして軽薄なる時代なり。信仰なき時代なり。今日主義の時代なり。此時代の現世的欲望は甚だ大なりしかども、未来に関し、永遠に関し、人生に関する宗教的信念は甚だ薄し。一言にして曰えば此時代の特徴は逸樂主義⁽⁸⁾なりき⁽⁹⁾」⁽¹⁰⁾「宗教なき彼等〔元祿時代の人々〕は目前の快樂を以

て人生の目的となせり。……人生は化して動物園たらんとせり。」⁽⁹⁾

しかもこの「泰平と物質的の進歩とは俸米を命とする武士に取っては非常なる強敵」⁽¹⁰⁾であった。けだし武士は「唯定額の禄米を給せらるるのみ、而して米の比較的価格は物質的の進歩と共に日に下れり。昔し世の質素なる時に方りては、一石の米を売って、優に一年の生計を為するを得、一斗の米を売って、たくましき男を一ヶ月間使役することを得たるも、今は世につれて『体面ある生活』を為さんには盡く禄米を売っても、猶且不足を告げ、見ぐるしからずして、役に立つ奉公人一人をかかへんには昔し大男數人を傭ひだけの米を売らざるを得ざるに至れり」といふわけだからである。かくて「物質的の進歩は平民の凱歌にして武士の墮落」⁽¹²⁾を意味し、「武士」対「物質的の進歩」は「最大の問題」⁽¹⁴⁾となり、明治維新の遠因も一つはここに求められた。

注目すべきはこうした江戸時代における文明の「進歩」の「法則」的帰結は、愛山において、明治以後の文明の「進歩」にも貫通していると考えられていたことである。維新以後の「眞個に世界を驚殺せりと云べ」⁽¹⁶⁾き「進歩」も、「詮じ来れば是唯物質的の文明に過ぎず」⁽¹⁸⁾、「社会の各方面は放縱なり、乱暴なり、制裁なきなり」⁽¹⁷⁾、「余は當時を回顧して日本人民の獸欲を抑制すべき威権の甚だ微弱なりしを驚かずんばならず、試みに当時の出版物に就て一瞥せよ。明治七年に出版せられたる東京新繁昌記の如き、此年頃より十四五年頃まで連続して出版せられたる東京新誌の如き、各新聞紙の雑報の如き、好んで閨房を画き、好んで痴情を写し、好んで肉欲を挑発し、殆んど春宮、淫書に異ならざるものありしにあらざるや」⁽¹⁸⁾、それは愛山によれば「人心の懷疑的唯物的にして信仰なく、畏敬する所なかりし反影」⁽¹⁹⁾にほかならない。「余りに凡俗なるは近世の弊なり、余りに物質的なるは近世の弊なり」⁽²⁰⁾ではそうした「物質的進歩」と「信仰の喪失」とがあいまって行きつく所は何であったか。明治三〇年代以後の愛山の「政論」の一貫した問題関心の一つは正にここにあった。まず近代の、産業革命以後の「物質的進歩」は、「黄金」を社会的支配者たらしめた、と

される——「昔の武士は一劍に仗りて天下を横行し、一身の面目を劍の影に防衛し、進んでも唯一劍、退いても唯一劍、自由も劍の光に輝き、独立も劍の下に保ちたり。……さりながら劍既に錆び、鎗既に折れたる郡界の世界に於いては自由を愛し、独立を好み、体面を重んずる紳士の頼りて以て金城鉄壁となすべきものは何ぞや、嗚呼唯黄金あるのみ。是れは虫が好かぬ道理なれども眞の道理なり。されば郡界時代の劍道は則ち金儲の術たるに外ならず」。もとより愛山も江戸時代の武士が、大名の使用人としての側面をもっていたことを知っている。それは彼によれば「銃砲の渡来」による「社会的革命」の結果であつた。しかし注目すべきは現代において、あたかもかつての大名とその使用人としての武士に照応するかの如き現象がみられることなのである——「世の中は何時か昔に返りたり。大名が鎗を立て従者を連れて大道狭しと濶歩したる昔の封建社会を可笑しと見たる人の眼に今や黄金を城廓とする新大名の現出を映ずるに至れり」。今の世には大名なきかと云ふに何ぞ其れ然らん。……今の世は大機械の世の中にして従つて大資本の世の中……日本に岩崎家三井家といふ者あり。其富は実に莫大なり。日本商工業者の大部分は直接間接に之に関係せざるもの少し。其社員には幾多の英俊を網羅せり。是れ言ふまでもなく新大名なり。其社員は即ち家中なり。……三井三菱は昔しの前田・島津なり。……見来れば世間大名ならざるはなく、大名の家中ならざるはなし。今の世は猶ほ古の世に異ならず。……今の世も猶ほ許多の大名ありて、互に其版図を争ひつつある者なりと知れ」。

こうした状況はまず「代議政体」の危機をもたらずと考えられる。けだし「個人の独立、他人に頼らず他人を頼らしめざる中等社会の存在、即ち独立の投票の存在、これが代議政体の眼目だ」が「産業的革命」によつて「大資本の必要が生じ大富豪が世の中を支配するやうになり、人は皆一個人でなくなつて社員」と化したからである。「大名として城主として武士としての貴族は亡びたり。而れども大資本主として大地主として大会社長としての新貴族は起れり。……神に次ぎての万能力を有する黄金を以て其家系とし其朝廷とし其封土とする新大名は到る処に崛起し、漸く

代議政体の進行を阻碍せんとせり。……昔しは鳥羽帝の時、數ば制符を下して諸國の武士の源平二氏の家人となることを禁じたりき。何となれば此の如くにして止まずんば天下は終に武人の有に帰すべければ也。今や天下の政治家なるもの其大富豪の家人たり若しくは被官たらざる者果して幾何ぞ。……代議政体は民権を保存すべき安全の金庫なり。而も此金庫と其鍵とを併せて一齊に盗み去るものあらば即ち如何²⁷」。しかもこうした状態が、精神状況における「懷疑的唯物的」傾向さらには信仰の「墮落」ないし喪失と結びつく時、危機は正に全体的なものとなる。愛山は先に引いた文章につづけてこう主張する。

「而れども是れ猶深憂大患に非るなり。余が世界の爲めに最も深く憂ふるものは外に在り。即ち信仰の墮落是也。西欧の文明は久しく基督教の文明なりと称せり。而れども余の見る所を以てすれば今や基督教は其根底より動揺しつつあり。……パウ、ストラウスやの故國たる高等批評の日耳曼は申すも愚かなり、保守拘泥を以て名ある英國より凡俗にして執迷なる米利堅に至るまで懷疑の精神は今や教育あるものの全社会を掩へり。……是豈代議政体の否寧ろ之を汎論すれば西欧文明の一大危機に非ずや。夫れ政治問題の根は實に信仰の問題なり」²⁸。

さらに彼によれば、國際關係の変化がこうした危機的状況を倍加する。愛山は國際關係を支配する「法則」としてまず進化的「生存競争」をあげるが、「文明の進歩」がそれをますます強く意識させるようになったことを強調する——「文明の進歩は交通の發達を促し交通の發達は國と國とを接近せしめ所謂國家存在の問題をして倍々其緊切度を増加せしめたり。昔しはバックルの英國文明史を著すや英仏二國の相惡むは交通機關の不完全にして互に相理解せざるに在りとなし、其發達と共に二國民の相互に嫌惡する情を減すべきことを論じたり。而れども是れ過去の問題のみ。國際の問題は今や感情の問題に非ずして生存競争の問題となれり」²⁹。「第十九世紀までは交通の道具も備らざりしかば世界に國を立つるものは多しと雖も、國と國との間は猶隔たりて外國人と云へば何とやらん遠き國より來りし人

の如き感あり、……今は四十余日にて全世界も一周し得らるべく、国境は唯地理学の空名に過ぎず、次第に相近ぶき相触るるに至りたれば国権国富は一日も油断なり難き問題とはなりぬ⁽³⁰⁾。愛山は国際関係の緊密化が、一方で国家間の相互影響性を強め、外交と内政を有機的に密接に結びつけ、思想や法律制度等の国境を超えた普遍化傾向を進めることを認めつつも、他方それによって国家間の「生存競争」はますます激化する、と考えたのである。そこから「方今の世界は各国各繩張をなし、他人若し其中に闖入すれば直ちに劍戟を揮って自家の権利を保護すると云ふ有様にて、一言にして曰ば戦国なり」という認識が生ずるが、傍点部の言葉に示されているように、それは正に、古代中国の春秋「戦国」や、日本の「戦国」時代の歴史を引照基準「frame of reference」として成立したものであった。そして彼が「戦国」状況における「外国交際の実体は殺人罪なり」という「列国交際の裸体的事実」をみた時、愛山は「正義と人情とを世界に植ゆる最後の手段は唯我腕力に頼るの外なきを信ずる」に至り、やがて「帝国主義の信者」たることを自認するに至るのであった。

以上の考察から明らかな如く、個人の信仰問題から国際関係に至るまで、愛山の現状認識は彼の史論における歴史的認識と密接に関連し、両者は相互に規定しあう関係にあった——「古は猶ほ今の如し。現代は活きる古史なり。古史は死したる現代なり。……史学の鍵を有せざるものは決して現代の秘密を開く能はざるなり⁽³⁶⁾」。こうした立場にたつ時、現代の問題状況に対する解答もまた、「史論」の型で示される。たとえば前述のような「物質的進歩」による「新大名」の出現に対して、彼は次のような「新武士道」をもって答えようとするのである。

「昔しは武士と云ふ者あり、大名に事へて家中と称し、一身を献げて君の馬前に討死するを榮譽としたり。而して更に其家中の昔を尋ぬれば元是れ一種の組合なり。即ち北条早雲が七人の英雄と共に剣を杖きて東行し、覇を関東に唱へしが如き是れ七人の組合なり。……今の組合は或は商売の為にし、或は工業の為にし、或は宗教の為にし

し、或は政治の爲にし、当時の組合は攻城野戦の爲にするの差異あれども其組合たるは一なり。共に衆心を合せ衆智を用ひて其事業を成したるに至つては敢て大差なきなり⁽³⁷⁾。

この観点からみると前にも引いたように、「大名の家中既に一種の組合⁽³⁸⁾」であり、現代の三井三菱も「新大名⁽³⁹⁾」であり、「見来れば世間大名ならざるはなく、大名の家中ならざるはなし⁽⁴⁰⁾」。従つて「世間既に新大名と其家中との世の中なれば人と組合はぬ事業は到底成功せざる者なりと知るべし。……勿論衆人皆濁れるを以て独り自ら其清操高節を誇るも君子の事業なるべしといへども、更に濟世の猛志を奮い起し、天下俠義の人と共に組合ひて世の不正不義と奮闘するは最も賢き事なるべし。法然、日蓮、ルーテル、カルピンの如き一世の潮流と反抗したる人にも猶ほ其同志はありしなり⁽⁴¹⁾」とされた。

この愛山の「新武士道」の具体的意味は、いわば「自発的結社のすすめ」にはかならない。「昔の武士」が「進んでも唯一剣、退いても唯一剣、自由も剣の光に輝き、独立も剣の下に保⁽⁴²⁾」つたのに対して、現代の「剣」なき「武士」は、「組合」≡自発的結社によつてこそ「独立」と「自由」と「抵抗」の精神を保ちうる、と愛山は考えたのである。この発想は彼が明治三二年から三六年まで信濃毎日新聞の主筆をつとめていた間にいよいよ強固なものになり、その後一貫して主張していたものであった。たとえば彼が信毎主筆として赴任して真先に主張したのは、「盛んに社交倶楽部を起すべし⁽⁴³⁾」という点であつた——「我輩は都會の生活を以て有害なりとする者なり、然れども其人物に富むが爲めに切磋琢磨の益あるに至つては、是れ終に村落生活の及ぶ所に非ざるなり。自然に富みて人物に乏しく存養省察に長じて激励鼓舞に短なるは村落生活の欠点なり。如何にして此欠点を補ふべき、我輩は盛んに社交倶楽部を興すを以て最も切要なる方法とするものなり⁽⁴⁴⁾」。こうした発想は「村塾」「私塾」のすすめから⁽⁴⁵⁾、やがて「労働者小作人諸君⁽⁴⁶⁾」に対する「諸君何ぞ晩酌の半合を減じ村芝居の奢りを抑へ、微を積み細を累ねて以て富豪の金力と對抗するの道を講

ぜざる。而して此金を以て結社せよ。……結社は勢力なり。諸君唯だ結社せよ」というよびかけにいたるまで一貫していた。しかしながら問題はこうした自発的結社が、後述するような愛山の国家観との関連において、たえず「一個のオルガニズム」として考えられる国家に埋没する可能性をばらんでいる点にある。ここに至って我々は彼の「史論」と「政論」の根底にある国家観、ないし国家と個人の関係、について考えてみなければならぬ。

(1) 江戸時代への関心が当時如何に一般的であったかは前章でのべたが、ここでさらにもう一つの例証として、徳富蘆花「思出の記」の中から、主人公菊地慎太郎が「徳川時代封建的日本の研究」を志さすくだりを紹介しておく。この主人公は「千代田の城を仰ぐ毎、戊辰の弾痕猶残る東台の森を散步する毎、……新東京の真中に封建の昔を語る長屋門、屋敷跡を見る毎、新聞紙上に某の伏客某の老爺など江戸時代の遺物の没去を見る毎、……封建時代の面影は髣髴として眼前に湧き出づるを覚へ」非常の興味を喚び起され、やがて次のように決心する——「維新を距る僅か二十余年の今日此頃でさへ、幕府の代は最早雲霞と隔つて居るに、今の若者の子や孫曾孫の時代となつたら、如何であらふ。未だ其記憶の較新なる今、故老の存する今、記録物件の多き今、而して其物の実形実質を見るに尤も都合よき距離を隔つる今は、即ち画布の上にかと描き留め置く好時機であるまいか、まさに其時機である。僕は試に之を描いて見やう。而して僕は之を描くに、正史の体を用ゐず、史的小説の体によつて……此封建日本の活写真を伝えて見たい。……僕は歴史以外の歴史を画めて見やう、……即ち一部の新日本外史を画めて見やうと思つた」(筑摩書房版『現代日本文学全集』第五卷所収、二七六頁)。勿論これは明治三三〜四四年に書かれた小説中の一人物の述懐にすぎない。しかしこの作中では、明治元年生れの主人公が、明治二一、二年頃帝国大学文科大学在学中に抱いた感想であり、この小説が「実に善く世相を捉へて居る。時代描写としては、永久の価値がある」(馬場孤蝶の評語、『蘆花全集』付録「落穂」)第二号、中野好夫「蘆花徳富健次郎」第二部九二頁より重引)とすれば、この一節も当時の精神的雰囲気伝えているといへよう。

(2)(3) 「史学論」『国民新聞』明三三・七・二〇。『全集』三三五頁。

(4)(5) 「近世物質的の進歩」『全集』二六七頁。

(6) 「荻生徂徠」『史論集』一三〜四頁。

(7) 「近松の戯曲に現はれたる元禄時代」『文集』二二二頁。

(8) 「新井白石」『史論集』一三八頁。

- (9) 同前、一四〇～一頁。
- (10)(11)(12) 「論史漫筆 三省録を読む」武士と物質的の進歩(上)、『国民新聞』明二六・一〇・二二、『全集』三〇六頁。
- (13)(14) 同前(下)、同紙明二六・一〇・二八。同前三〇八頁。
- (15)(16) 「英雄論」『全集』二四七、八頁。
- (17)(18)(19) 「現代日本教会史論」『史論集』三三七、九頁。
- (20) 「拝人教」『国民新聞』明二六・一〇・八。
- (21) 「現代金権史」『全集』一三頁。
- (22) 「日本の歴史に於ける人權発達の痕迹」『全集』三三三頁。その他「日本戦記」等にも同様の記述がある。
- (23) 「現代金権史」『全集』五七頁。
- (24) 「新武士道」『信濃毎日新聞』(以下では「信毎」と略称)明三三・五・二六。『文集』三六〇～一頁。
- (25)(26) 「民心の変遷(十二月三日東京婦人矯風会における演説原稿)」『婦人新報』二〇号、明三一・二・二〇。
- (27)(28)(29) 「青年の日本が解釈すべき謎語」『世界之日本』明三三・二・四。
- (30) 「第二十世紀の論(七)」『信毎』明三四・一・一六。
- (31) 「平和主義の是非」『信毎』明三四・四・七。
- (32) いくつかあるが一例として、「春秋列国の局」『国民之友』二六二、明二八・九・三。
- (33)(34) 「戦国策とマキャベリを読む」『国民之友』三六一、明三〇・九・一〇。『文集』三二二頁。
- (35) 同前、三二三頁。
- (36) 「書齋独語」二頁。
- (37)(41) 「新武士道」『文集』三六〇～二頁。
- (42) 注(21)と同じ。
- (43)(44) 「盛んに社交倶楽部を起すべし」『信毎』明三三・四・一八。
- (45) いくつもあるがたとえば「私塾を建つべし」『信毎』明三三・二・七。『小品文集』六一頁。
- (46)(47) 「評論」『独立評論』明四三・二。

(48) 「日本の歴史に於ける人権発達の痕迹」『全集』三二六頁。

五、国家と個人

(一)

愛山において国家、および国家と個人の関係はいかに把握されていたか——それをさぐることは、彼の政治思想の核心にふれることになるであろう。ここではまず個人と社会の関係が彼においていかにとらえられていたか、の考察から出発する。

愛山によれば、人類は本来孤立した「独り棲みの動物」であつた。しかし「人類が動物として他の動物と同じやうな進化の道中をする間に」生存の「便宜の爲めに社会を結んだ」⁽³⁾。すなわち社会を結ぶことは必ずしも「人類の天然の約束」⁽⁴⁾ではなく「偶然の結果」⁽⁵⁾であるが、それによって単なる「動物として極めて弱い者」⁽⁶⁾である人間は、「社会的動物として強い」⁽⁷⁾存在になつた。しかるに「ダルウィンが進化論を言ひ出して、総て有機物には生存競争と云ふ理法が行はれて居」⁽⁸⁾るから、社会と社会との間にも「生存競争」が存在する。そこで社会は他の社会に対し一方では「共同防衛」の爲に内部的統一を強化し、「此に社会の有機的組織則ち国家の機能を生じ」⁽⁹⁾、他方社会保存の爲に「公共心、即ち国家維持の力」⁽¹⁰⁾が発生した。この「公共心」は本来「社会を保存する爲の便宜法」⁽¹¹⁾であつたが、幾世代も経るうちに人間にとって「第二の天性」⁽¹²⁾となつた。「公共心」の最後の目的は「社会の一員となつて社会の爲めに戦ふ」⁽¹³⁾ことであり、その戦は必らず犠牲を要求するから「人類の目的は社会の犠牲となるに在る」⁽¹⁴⁾とされた。つまり愛山は個人と社会との関係を、個人は「利益の爲めに、便宜の爲めに」⁽¹⁵⁾社会を形成したのであるが、一旦その社会が形成された後はその社会維持の爲犠牲になることがその目的であると説くのであり、個人と社会の関係において、目的—手段の関

係は社会の形成を画期に顛倒してしまふ。社会は本来個人の生存の手段であつた筈なのに、一度社会が形成された後は逆に個人が社会を保存する為の手段と化してしまつたのである。この発想の背後には愛山の社会のとらえ方、及び社会と国家の關係がからんでいる。前述の通り愛山においては、社会を人間の作為の所産であるとする考え方がないわけではないが、きわめて曖昧である。前章でみたように、彼は一面では自発的結社 *voluntary association* の意味を強調していた。にもかかわらず、対外的生存競争との関連で国家が「一個のオルガニズム」として考えられる時、すべての集団はそうした有機体としての国家の一分肢とみなされ、国家それ自体はあくまで一個のメカニズムでなく有機的共同体として全体を包含する存在となつた。愛山において、国家は元来「社会の有機的組織」として「共同防衛の機関」⁽¹⁸⁾として社会から機能的に分化したものとされ、両者は一応区別されていた。だがもし国家が「防衛機関」「戦闘の機関」であるとされるなら、国家を社会から区別するのは何よりもまず権力的契機であるとの認識がなされ、そこから権力装置⁽¹⁹⁾≡支配機構としての国家の把握、さらにはそうした権力機構・法的機構としての国家と社会との二元的緊張の発想も可能となつたであらう。現に愛山には国家を「防衛機関」とみる視点と同時に、「法律を造り、法律を施行し、法律を擁護する」⁽²⁰⁾機関とみる視点もあつたのだ。しかしそうした考え方は彼においてついに貫徹されなかつた。国家間における生存競争を重視する彼の進化論的発想が、当時の国際關係を「戦国」としてみる考え方に結びついた時、国家における力の契機はもっぱら対外的側面においてとらえられ、対内的にはひたすら連帯性の契機「相感同情」⁽²¹⁾「相互の愛情」⁽²²⁾が強調され、国家と社会の区別はいまいとなり国家内の支配服従關係がほかされてしまふのである。以下この国家観をもう少し立入って考察してみよう。

愛山によれば国家は他国の侵略に対する「防衛機関」の側面と共に、「経済的の意義に於て……樹液の全樹を循環するが如く一國の富の人民各個を潤す為めに有機的に活動する」⁽²³⁾側面をあわせもつ「共同生活体」⁽²⁴⁾であつた。この後者

の側面は現代の「帝国主義」段階にあっては「合資会社たる資格を以て自ら或る商品を専売し、自ら沼を乾し、自ら木を植へ、自ら製造所を立て、自ら商売を為し自ら植民せんとする公共營業機関」²⁸の形をとる。その前提とされたのが第一にテクノロジーの発達とそれによる交通の進歩であり、第二が「大富豪」の出現である。愛山は「応用科学は大機械の発明を促し、大機械の発明は大工場を生じ、大工場は資本の集中を生じ此に大富豪を現出せしめ」²⁹る過程が歴史的必然性をもつことを認めた。その際「大富豪既に其富を利用して新しき奴隷を作らんとす。其横暴を制するの道、唯大富豪のそれよりも更に大なる富を有し、更に有効なる活動を為し得べき国家の経営を待つのみ」³⁰とされた。

愛山の「国家社会主義」の構想は、ここに根底をもっている。ここでは彼の「国家社会主義」をそれ自体として考察することはしないが、当面の問題である国家観との関連で若干の問題点を指摘しておこう。

まず第一の問題点は、愛山が自らの「国家社会主義」を、「日本国民の総体は一家族なり」という「国体」³¹の上に基礎づけている点であり、第二には「共同生活体」としての国家から狭義の「国家」³²、「主権者及び其代表者たる国家機関の全体」³³を区別し、それを「豪族」(現代においては「紳士閥」)「平民」と対置し、「何れの世の中にも国家、豪族、平民の三階級あり。国家の威力盛んにして他の二階級を圧するときは豪族平民相合して国家の暴圧を抑へ、豪族独り専横にして平民を虐遇するときは国家、平民相呼応して豪族を抑へ」³⁴るという「三元論」³⁵を以て「マルクス一派の二元論」³⁶に対する独自性を主張している点である。

第一の点についていえば、愛山が「家人父子の関係を以て国体の本義とす」といい、「皇室は人民の父母」³⁷として「国家則家庭主義」³⁸を強調したことは、彼の国家観を明治国家の「正統」的「家族国家」³⁹観と一面きわめて似かよったものにした。にもかかわらず両者を比較してみると、愛山においてはとりわけ「国家の各要素」間の「相感情情」⁴⁰「相互の愛情」⁴¹「君民は喜憂哀楽を共にせざるべからず」⁴²という側面が強調されていることが目立つ。もちろん「家族

国家」観にもそうした側面は含まれており、とくに明治末期以後は「義は君臣にして情は父子」として強調された点でもあった。しかし愛山は「相感同情」や「相互の愛情」をとく反面、上下の権威的支配関係や「忠孝一本」「祖先崇拜」等にはほとんどふれず、「家族」を父子の権威的上下関係よりも、トに對するウ、チの成員の凝集・連帯としてとらえている。それは「正統」的「家族国家」観の一方の契機たる儒教的家族主義（Patriarchal Familyism）、恭順（Pietist）の家族主義（Pietist Familyism）に對していわば「みつばちの論理」としての家族主義といえる。あえて愛山自身の言葉によって區別すれば「家族」主義というより「家庭」主義といつてもよからう。

以上を考えあわせると愛山の「家庭国家」観は、明治国家の「正統」的「家族国家」観に内在していた「一君万民」的側面、家族的連帯の側面を、よりラディカルに一面的に強調したものであり、その限りで表面的な類似にもかかわらず「正統」的見解からはみ出る可能性をもっていたといえる。それを示唆する一例として、明治四四（一九一一年）春、大逆事件の衝撃の記憶がナマナマしく、しかもさらに追討をかけるように「南北朝正閏論」が問題となつてきたその最中に書かれた「楠木氏始終の事」と「尊王論」を手がかりとして、考察してみよう。

そこで愛山がまず強調するのは「大日本に於ては至尊の政治上に於ける御位置は絶待的（絶対的）のものにして關係的なものに非ず」という天皇の政治的超越性であり、「古より今に至るまで天下の政道には必ず之を奉はり行ふ輩のあつたので、至尊自ら下つて有司の事を執りたまふなど云ふ事のないのが即ち我が御国体」という点である。愛山によれば、皇室ⅡA、公家ⅡX、武家ⅡY、富豪ⅡW、平民ⅡZ、と記号化して、日本の政治形態の変化を図式化すると次のような型になる。

公家政治 AXYWZ

武家政治 AYWZ

富豪政治 A W Y X Z

平民政治 A Z W Y X⁽⁴³⁾

つまり皇室ⅡAは常数 constant であり、他の各階級は変数 variables とされて、「A則ち皇室が絶対至尊の聖体にして王臣政務の任に当り、責任を君主に負ふと云ふ国体に至ては則ち寸毫も毀損せらるることなし」⁽⁴⁴⁾。従つて愛山によれば公家政治から武家政治への変化は、決して武家が皇室から政權を奪つたことを意味しない。変わったのは「政務を奉行する人格」⁽⁴⁵⁾であるにすぎない。同様に明治維新を「王政復古」とよぶのも不正確で、王政は神代から今日まで「一毫の毀損もなく」⁽⁴⁶⁾、大政奉還というのも「二百六十余年の間政務の御委任を蒙つた長期内閣の徳川氏が政權の座から退き、他人が之に代つて短期の内閣を組織することになった迄」⁽⁴⁷⁾にすぎない。こうした立場からすれば「日本の歴史には官賊の対立すべきものなし」⁽⁴⁸⁾ということになる。さらに彼は天皇の政治的超越性からすんで、その思想的超越性をも主張する。彼によれば「其時代の哲学を尊王論の基礎にしやうとする」⁽⁴⁹⁾のは「危険な傾向」⁽⁵⁰⁾である。ただし「其時代の倫理学、哲学と云ふものは、多くは其の時代に権力のあるものの位置を弁護するやうに出来て居る」⁽⁵¹⁾が、他方現在の権力者を打倒し新しい時代を作ろうとする思想も存在し、「是を其時代の目から見れば危険思想」⁽⁵²⁾だが「其思想が世の中に行渡り今までの世界が顛覆すれば今度は其思想が一代を支配する」⁽⁵³⁾からである。従つてある特定の「時代の倫理学、哲学を土台として、其上に尊王論を築かうとするのは主客を顛倒したもの」⁽⁵⁴⁾で、「或る倫理学、或る哲学をのみ尊王論の基礎であると考へ、それと異つた思想を迫害」⁽⁵⁵⁾する「異端征伐」⁽⁵⁶⁾は「以ての外の心得違ひ」⁽⁵⁷⁾として斥けられ、「皇室の尊嚴は思想、哲学、信仰の変遷の上に超然として居る」⁽⁵⁸⁾点が強調される。

「抑も我皇室は国民の思想と争ひたまふ様な小さいものではありません。日本の光榮ある歴史は皇室が思想変遷の歴史以外に超然とし、如何なる思想も凡そ日本に入り来つたものは遂に尊王を説くやうになる事実を示し……其

哲理から云へば無君無父を教ふる様な思想でも、それが日本へ来た後は不思議に角が取れて御国体に合ふ様になることは今日まで其例の多いことでもありますから、我々は今後も其通になることであらうと思ひます」。

しかもこの主張は、「昔は外国の思想も日本へ移つて来た後は外国とは氣息の通はない孤島の日本へ移つたのでありますから、日本化するのも当然」だったが、「今日の日本は太平洋の孤島」ではなく「世界の日本」となったという精神的「開国」の自覚によって支えられていた。

「世界のためになりましたから世界に於て……危険思想である上は日本に於てもやはり……危険思想でありませう。丁度昔の欧羅巴で耶蘇の新教と旧教の争がありました時代に各国の旧教徒が互に謀を通じて其国の異教徒と戦つたことがあります、今日の危険思想も思想だけなら別段恐しいものでもありませんが、其背後には各国に散在する同主義者の声援がありますから其煽動が恐ろしいのであると云ふ人があります。……しかし我々は此心配があればこそ益々思想の争に於ては我皇室の常に超然として何事にも御取合遊ばされぬことを冀ふのであります。……日本が既に孤島の日本で無く、世界の日本となつたからには世界の思想が日本に入り込むことは所詮免れぬ運命であります。思想に国境はなく、学間に東西の別はありません。如何ほど吟味いたしても論者の所謂危険思想の侵入を杜絶することは先づ不可能の事と言はなければなりません」。

つまり愛山は一方で、世界の中に日本があり日本の中に世界があるという「開国」状況の自覚と、思想学問の普遍性の信念に支えられつつ、他方「国体」の「無限抱擁」性の伝統を逆手にとつてそれを一面的に徹底させることにより、正に明治国家の「正統」的立場からはかけはなれた地点に立つことになつたのである。しかしだからといって、彼は決して完全な「異端」とはならなかつた。それどころか彼は明治国家の「異端」というべき社会主義者の目からみても、ちがった意味で「異端」的なのである。前述した第二の問題点「三元論」の主張は、実にこの点に関連し

ている。

愛山は前述の如く、一方における富の集中II「大富豪」の出現と、他方における多数平民の窮乏化が資本主義社会の必然的産物であることをはっきり認めていた。従つて彼は労働者と資本家の二大階級分裂の事実を認め、その点マルクスに賛成する。しかし階級分裂の認識から階級闘争へと進む時、彼はマルクスから離れ、マルクスの「二元論」に対し自らの「三元論」を対置する。それは彼によれば「マルクスの精神を継承し」65「マルクスの研究法を自國に應用した」結果にほかならず、次の如く定式化された——「日本歴史は國家（主権者及び其代表者たる國家機關の全体を指す）と豪族と人民との三階級が國の内外の情況に依りて或は争闘し、或は調和し、依つて以て共同生活の思想を實現せんとしつつかある動作の連続に外ならず……概して曰へば國家は其健全なる時に於ては常に人民の味方にして豪族の敵なりしが如し」67。この観点から愛山は「國家は……必ずしも紳士閥の産出したるものにあらず。或は仮りに數百歩を譲りて……國家は紳士閥より出でたるものにも、猶ほ紳士閥に対しては可成獨立自由の動作を為し得べきものなり。されば平民級は此國家と上下相呼応して紳士閥の專横を抑ゆべきものなり」68と主張して自らの「國家社會主義」を、「國家は富人級の隸屬にして富人級の代表者に過ぎざれば平民級の爲めには共同の敵なりとなす」69「マルクス一派の社會主義」からはっきり區別したのであった。

こうした愛山の見解に対し、明治の「正統」社會主義者を以て自他共に任じていた堺利彦が、その「國家」の意味の多義性をつき、その「中等階級主義」を批判し、「其の獨創の家人父子説を割愛」せよとよびかけたのは、「マルクス派社會主義」からの「正統」的批評として正に当然といつてよからう。しかしたとえば「家人父子説を割愛」せよという批判は、愛山にとってはうけ入れがたいものであったにちがいない。何故なら彼の「國家社會主義」は、堺らの「社會主義」が「翻譯的」であるのに対し、「日本歴史の研究より生じたる獨立の思想」70であることを特色としていた

からである。しかもその研究の方法は「マルクスの精神を継承し」⁽⁷⁶⁾「歴史的・科学的の研究法」⁽⁷⁶⁾であり、この点に関する限り彼は自らを、「醇平として醇なる『マーキスト』なり」⁽⁷⁷⁾と高言してはばからない。さらに彼は堺らに向つて次のように問いかけたのである――

「マルクス若し地下に霊あらば、単にマルクスの既に主張したる述をのみたどり糶^{かひ}の生へたる階級的争闘^{クラス・ストゥルツネル}の旧信に及ぼし独立の見解を以て独立の社会主義を唱んとするものを喜ぶべき乎」⁽⁷⁸⁾。

つまり愛山は彼なりに理解した「マルクスの科学的研究法」にあくまで忠実であろうとした結果、「三元論」という独立の立場に達し、はからずも「正統」的社会主義者に対し「異端」的立場に立つことになつたのである。そこに彼の「生涯を一貫したる大動力」としての「独立」と「抵抗」の精神が貫通してゐたことは明白である⁽⁷⁹⁾。

(1) 「世界の過去現在未来」大六・四。一三頁。

(2)(5) 同前、八頁。

(3)(4) 同前、二〇頁。

(6)(7) 同前、一三頁。

(8) 同前、一四頁。

(9) 「社会主義管見」明三九、『全集』一二六頁。

(10) 「世界の過去現在未来」七頁。

(11)(12) 同前、二二頁。

(13)(14) 同前、二九頁。

(15) 同前、二二頁。

(16) 注(9)と同じ。

- (17) 「余が所謂帝國主義」(上)『獨立評論』二、明三六・二・一。『全集』三四二頁。
- (18)(19) 「社會主義管見」『全集』九九頁。
- (20) つまり愛山においては、國家を含めて、あらゆる自發的結社は人間によって作爲されたものであるにもかかわらず、一度對外的關連で考えられるとたえず共同体に転化していく可能性を内在しているのである。
- (21)(22) 「社會主義管見」『全集』一〇七頁。
- (23) 「余が所謂帝國主義」『全集』三四二―三頁。
- (24) 「社會主義管見」『全集』一一六頁。
- (25) 「余が所謂帝國主義」『全集』三四二頁。
- (26)(27) 「社會主義管見」『全集』一〇六頁。
- (28) 同前、一二四頁。
- (29) 同前、一二五頁。
- (30)(31) 同前、一二七頁。
- (32)(33) 同前、一〇六頁。
- (34) 同前、一〇五頁。
- (35) これについては、石田雄「明治政治思想史研究」の分析に従う。
- (36) 「社會主義管見」『全集』一〇六頁。
- (37) 注35の書参照。
- (38) 愛山は「蜂は一匹の蜂としては何でもない」が「彼等が群を為す所に彼等の価値がある」と強調する(「世界の過去現在未来」三七七頁)。なお第二章でもふれた通り、彼が教會をさして「天國の模型にして此世に於ける最も高く最も美しき共同生活體」(「評論」『獨立評論』明四三・四)といい、「私は人々皆兄弟姉妹を以て相待ち、此世の風波に対したノアの兩舟となつて居た教會生活の甘味を乘てる訳には行きません。寺院と云ひ、教會と云ひ、同行と云ひ、講中と云ふが如き信仰の友の生活は人類が此世に作つた最も愉快なる制度の一と思ひます」(「予が信仰の立脚地」『六合雜誌』三七四、明四五・三・一)とのべているのは、第一章で指摘した幼少時体験と相まって、愛山の國家觀ないし広く集團觀の根底にあるものを示唆しているように思われ

る。

- (39) 『国民雑誌』明四四・四、所収。
- (40) 『国民雑誌』明四四・五、所収。
- (41) 「楠木氏始終の事」前掲注(39)。
- (42) 「尊王論」前掲注(40)。
- (43)(44) 「楠木氏始終の事」前掲。ただし「富豪政治」と「平民政治」は「今より後」のこととされている。
- (45)(46)(47) 「尊王論」前掲。
- (48) 「楠木氏始終の事」前掲。この官・賊カテゴリーの批判こそは「賊軍の子」としての愛山にとって終生のテーマの一つであった。たとえば未刊の稿本「日本人民史」においても、「日本ノ史家が賊ト云フモノハ大抵ハ言論ノ代リニ兵力ヲ用ヒタル変体ノ政黨ニ過ギズ」としてこの問題点が詳細に取上げられている。岩波文庫版「基督教評論・日本人民史」一九六頁以下参照。
- (49)(63) 「尊王論」前掲。傍点岡。
- (64) この点については、丸山真男「日本の思想」岩波新書版、参照。
- (65)(66) 「社会主義管見」『全集』一三四頁。
- (67) 同前、一二四、五頁。
- (68)(69)(70) 同前、一二七頁。
- (71) 堺と愛山は、堺が明治三〇年夏(五月)福岡から上京し、その後末松謙澄の主宰する毛利家編纂所の「防長回天史」編集事業に従事するようになって始めて知合ったが、以後両者は思想立場のちがいを超えて、終生の友人となった。日露戦争中、堺らが平民社によっていた頃、愛山はしばしば平民社を訪れているし、その後明治末期の社会主義者への弾圧のめつとも敵しかつた時後述の如く愛山は自らの『国民雑誌』に堺の文を発表させている。堺の側からみた愛山については、「堺利彦伝」「三十歳記」等参照。
- (72) 堺利彦「『国家社会主義梗概』を読む」『光』明三八・一二・二〇。同「階級戦争論に就て」『光』明三九・六・五、参照。
- (73)(74) 「社会主義管見」『全集』一三三頁。
- (75)(76)(77) 同前、一三四頁。

(78) 同前、一三五頁。

(79) この点は愛山の思想的立場づけを考へる上にかなり重要と思はれる。愛山は明治国家とその「異端」である社会主義者の両方に対して「異端」的であることは本文のべた。だから堺・幸徳らを中心として明治社会主義の歴史をみれば、愛山は「異端」的存在として、扱はれる。同様にたとえは明治キリスト教史において、愛山をとらえようとすれば、彼は正式の洗礼を受け、伝道師、キリスト教機関紙主筆等であつたにもかかわらず、彼の信仰はどのキリスト教宗派からみても「異端」的であり、片隅で扱はれるにすぎない。又愛山の「史論」は一面で高く評価されながら、しかし「正統」的アカデミズム史学からみれば、あくまで「異端」的存在である。さらに愛山は同時代人から「文学者」としても認められていたが、「純文学」的見地からは全く「異端」的存在であつた。つまり愛山は彼がかかわつた思想的立場・活動領域の何処にあつても、常にそれぞれの「正統」的立場に対して「異端」的立場に立っていたのである。否先の明治社会主義の例からもわかる如く、「異端」に対してさえ「異端」的なのである。いわば彼はあらゆる場合において「正統」と「異端」の間の「辺境」地帯の住人であつた。それは彼が、およそ何らかの出来合いの「イズム」や「立場」にそつくり身をゆだねることを、終始一貫拒否したからにはかならない。しかもそのことは愛山が単なるカレオンのオポチュニスト、ピラト的相対主義者たることを意味するのでは決してない。けだし愛山の思想の「辺境」性は「茅屋の平民」としての「独自一己」の自覚に基く「独立」と「抵抗」の精神によつて支えられていたからである。

(一)

我々が前節で考察した如く、愛山における個人は、近代の社会契約説が想定したような社会関係から独立した自由平等の作為主体としての個人ではなく、あたかも彼の宗教意識における超越的人格神ぬきの「世間内」性と照応して、本質的に共同体「内」的性格をもち、「共同生活体」としての国家を維持するために自ら進んでその犠牲となるべき存在であつた。しかしそのことは個人が国家の奴隸的存在たることを意味するのでは決してなかつた。彼が前述した「公共心則ち国家維持の力」とならんで、「個人の心則ち国家創造の力」をとくのはここに関連する。愛山によれば「一人の心の中には、其人が已めようとしても已むことの出来ない要求がある」、それは外からくるものでなく「内

から外に働き出す力⁽³⁾」であり、自然を征服し国家を創造する力となる。すなわち「一個人の心⁽⁴⁾」に起った「新しい理想⁽⁶⁾」が、長い間社会と戦い「犠牲の血が流され⁽⁶⁾」ついに「社会を制御する⁽⁷⁾」に至った時、それが国家を創造したことになる。これは「一人の中に生れた力が遂に社会に勝つた⁽⁸⁾」ことであり、「此個人の中に起る力は、結局何ものも亡ぼすことの出来ないものである⁽⁹⁾」。この観点からみる時「人の心は社会から離れて独立して居る……寧ろ社会に反対するもの……社会と戦ふものである。……人の志の深く確くなるのは反社会の努力に在る⁽¹⁰⁾」。愛山の生涯を貫く思想原理——「独立」と「抵抗」そしてその背後にある「独自一己」の自覚は、ここに登場する。

「人は始めは単純な社会の一員である。人と社会と同じ考へで……動いて居る……。さりながら、文明の進むと共に、個人と社会とは別なものになる。……さうすると、今度は其別なものになった人間自身は、自分の中に社会全体の利害より貴いもののあることを発見する。独立の自由を喜ぶ心は、此場合に起る。……彼は茲に於いて社会に抵抗する。社会を教へる。社会を征服せむと図る。これが国家創造の努力になる。此努力が若し止んだら、国は死んだものである。細胞が死ねば、身体も死ぬ⁽¹¹⁾」。

以上の考察から愛山において、個人はあくまで有機的共同体としての国家の一「細胞」でありながら、その「独自一己」の自覚に基く「独立」と「抵抗」の精神によって、国家との緊張関係にたちいたる事情が明らかとなったであろう。彼によれば個人は共同体としての国家に即自的に埋没しているのでもなければ、それから全く切斷されたアトム的存在でもない。個人は本来的に社会的動物であるが故に国家なしには存在しえないが、他方国家も又個人の「独立」と「抵抗」によって支えられなければ死んでしまう。その際彼の国家観がすぐれて有機的共同体であることが重要な意味をもってくる。けだし国家が無機的な冷たいメカニズムとしてだけでなく、有機的共同体として考えられているからこそ、それは個人の「独立」と「抵抗」によってたえず「創造」されなければならず、もしそれなしには

「死んで」しまふ、と考えられるからである。国家と個人との関係を考へるにあたり、国家を権力装置として把握できなかつた愛山の場合、国家と社会との二元的対立、権力によつても犯すべからざる個人の私的領域という発想は存在しなかつた。しかしその代りに前述のような個人の「独立」と「抵抗」と有機的国家との緊張、という発想があつた。そこにみられる個人の「国家内」的性格と、にもかかわらず国家との緊張関係が生ずるといふ関連の仕方は、第一章でみた宗教意識における「世間内」性と、にもかかわらず世間との緊張関係が生ずるといふあり方と、丁度照応しているのは興味深い。

さらに注目すべきことは、愛山における言論の自由の主張の背後にも、右のような発想が貫かれていたことである。それはたとへば彼が堺利彦等の拠る『新社会』を評した次のような文中にも明らかに示されている。

「我等は日本の言論界が諸君の如き言論を自由に解放せんことを切に希望す。そは我等の信ずる所に依れば、社会と政治に対する討論は何程自由にてても差支なきのみならず、徹底的に之を解放せざるときは国家、社会は却て外界に適應すべき活力を失ふべしと信ずるが故なり。試に思へ一の国家が新しき元気を以て他の国家の圧迫（生存競争）に抗し得る所以は何ぞや。……国家社会に関する自由の討論を許さざるは是れ国家社会を以て一定不変の鑄型に容れんとするものにして遇々以て国家の外界に適應すべき活力を失はしむるの道なるのみ。是故に我等は仮りに諸君の言論をして国家社会の現状を破壊すべき危険思想ならしむるも、猶ほ之を自由討論の壇上に導かんことを欲す。危険は自由の討論より来らず、生々の活機たる国家をして死型ならしむる言論圧迫より来る」¹²⁾

これは決して単なる空言ではなかつた。明治末年大逆事件の後、社会主義者に対する言論弾圧がもつとも厳しく、ほとんど発表の場がなかつたその時期に、愛山は一度ならず自らの主宰する『国民雜誌』誌上に堺利彦の文（『唯物的歴史観』に関するもの）をのせている。¹³⁾しかもそれは堺の説が自らと一致するからでなく、反対論であるが故にこ

さらそうしているのである。こうした言論の自由、「抗論の価値」⁽¹¹⁾に関する彼の信念は終生ゆるがなかった。⁽¹²⁾その点では愛山は若き日によんだJ・S・ミル「自由論」の次のような一節に最後まで忠実であったといえよう。

「議論若し之と闘ふべき異説なければ其生氣を失ひ其真義を失ふべし。……反対論なかりせば人間の思想は終に衰弱すべきなり」⁽¹³⁾。

ただ問題は愛山においてこうした自由の主張が、一方でたえず国家の対外的生存競争における適応の問題とかかわっていた点にある。そのこの意味を立入って考える為にも、我々は彼の国際関係観を考察する必要がある。

(1) (2) (3) 「世界の過去現在未来」二頁。

(4) (9) 同前、六七頁。

(10) 同前、五頁。傍点岡。

(11) 同前、四六二頁。傍点同前。なお同様の趣旨をのべた例として、「平民倶楽部講演集 個人主義」「独立評論」大五・五、等参照。

(12) 「一日一題」「独立評論」大五・四。

(13) 堺「唯物的歴史観」「国民雜誌」明四五・一。同「唯物的歴史観研究・愛山兄の批評に答ふ」『国民雜誌』明四五・二。

(14) 「抗論の価値」「信毎」明三三・七・九。

(15) その際注意すべきは愛山における「抗論」や「抵抗」は、決してヤツアタリ的な、抗論の為の抗論、抵抗の為の抵抗、ではなかったことである。夫レ漫リニ當時ノ主権者ニ抵抗シ其敗亡ヲ謀ルハ是レ所謂亂臣賊子ナリ。憤々ノ怒ニ堪ヘズ徒手ヲ振フテ祖龍ニ抗セントスルハ無秩序ノ破壊者ノミ」(『頼山陽ハ徳川氏の忠臣ナリ』『博聞雜誌』二〇、明二一・八・二〇)という初期の発想は、「真個に自由と独立を崇ぶものは真個に従順と秩序の甘味を解するものなり」(『従順と秩序』『信毎』明三三・六・二〇)ばかりならば今頃は日本の群島に欧羅巴の民政庁が出来て居る時分なり。……誰れが内閣に座はつても頓着せず、食つて働いて寝て居られればそれで宜しと云ふ如き毒気のなき好人物のみにては日本国の運命は危し」という観点から、「成丈多く謀叛人氣

質の世に蔓延はびこらんことを希望する」時でも、なお彼は「但し玉磨かざれば光なし謀叛人も之を教育せざれば壮士浪人に終りなり」(以上「人民読本を読む」『信毎』明三四・五・一八)とつけ加えるのを忘れなかった。つまり彼が求めたのは、教養ある cultivated 謀叛人だったのである。なお右のような「謀叛人のすすめ」が、福沢の「日本国民抵抗の精神」をうけついでたものであることはいうまでもない。

(16) 『自由論』を読む『信毎』明三三・八・八。

(三)

愛山の国際観を考察するにあたり、まず見落してはならぬ点は「史論」との関係である。前にもふれた通り明治二〇年代の愛山史論においては、江戸時代を対象としたものが多かったが、他に古代中国を対象としたものが若干あり、その中で現代の世界を春秋戦国に比する見方が行われていた。⁽¹⁾つまり現代の国際社会を「戦国」的状况として把握する視角が、早くから彼の中にあつたのである。それにしても二〇年代の史論は国際関係を正面から扱つたものはほとんどないといつてよい。それが急速に前面に出てくるのは三〇年代に入つてからであり、あたかも徳富蘇峰が「平民主義」から「帝国主義」に転向し世の批判をあびたのにきびすを接していた。愛山自身の語る所によれば、彼ははじめ「大日本論と称して大陸開拓の説を唱ふるものを嫌ひ……日本の領域は日本人には既に十分なり、兵備を粧らんよりも寧ろ貿易を盛んにする工夫をなすべし」といふ「小日本論」⁽²⁾の立場であつた。だが明治三〇年九月に発表された「戦国策とマキャベリを読む」⁽⁴⁾においては、一方においてなお「寧ろ……小日本党に同情を表す」⁽⁵⁾ことが言明されつつ、他方はっきりと「余は信ずダルウィンの規則は人類を支配す。人類は……幾何学的に播殖す。而して劇烈なる生存競争は必らず此間に起る。人間最後の問題は攻撃と防衛となり、膨脹と衰滅となり。而して之を決すべきものは国民の力也。……交際術や、辞令や、礼法や、人情や、宗教や、是れ唯腕力の維持を待ちて始めて効ある者の

み。……余は此点に於て軍備拡張論者に賛成する者なり⁽⁶⁾と主張されていた。さらに前章でもふれた、「文明の進歩」のもたらす国際関係の緊密化は、この「生存競争」に一層拍車をかけるものと考えられていた。こうした認識が相まって愛山はやがて自ら「帝国主義の信者」たることを自称するにいたるわけであるが、その時代的背景として、次にふれるような日清戦争後の急激な欧米列強の東アジア（とくに中国）への進出があったことは、いうまでもない。

さて我々が愛山の「帝国主義」について考察する際、まず注意すべきことは、それがどこまでも国際的「生存競争」に対する「適応」の論理で組立てられている点である。彼の比喩によれば、「夏は外気も暖かなれば」⁽⁷⁾（国際関係が緊密でない場合）「別段綿多き衣服を重ぬるの要なけれども」⁽⁸⁾（軍備拡張の必要なし）、「冬は之れに反し氣候極めて敵烈なれば」⁽⁹⁾（国際的生存競争が激烈な場合）「厚き衣服なきを得ず」⁽¹⁰⁾（大軍備が必要）、「之が為めには余事を略しても其用意だけは決して怠ることを得ず。殊に北極地方の如き土地に赴かば人間生活費の大部分を挙げて之を防寒具に用ふるは珍らしきことにはあらず」⁽¹¹⁾とされる。ここで彼が「北極地方」の比喩で指摘しているのは、正に当時の東アジアの状態であった。日清戦争後の三国干渉に始まり、日本を仮想敵国とする露清共同防衛密約（明二九）、アメリカのハワイ併合（明三〇）、ドイツ膠州湾租借、ロシア旅順大連租借、イギリス威海衛・九竜半島租借、アメリカのフィリピン領有（明三一）、フランス広州湾租借、義和団事変勃発（明三二）等々——これら一連の事件の衝撃が彼をして「帝国主義」が「天下の大勢」であることを否応なく意識させたのであった。しかし愛山は自ら「帝国主義者」と宣言した際にも「余は帝国主義の信者となりしが為めに自由を愛し、進歩を愛し、光明を愛する昔しの信仰を捨てたるに非ず。……余は固より自由を愛す。之を愛するが故に個人の自由を敬ふと共に更に深く国家の自由を敬ふ。何となれば個人の自由を保護すべき唯一の機関は国家にして而して国家をして他国の干渉より自由ならしむるに非んば其機関の正当なる運用を期すべからざればなり」⁽¹²⁾とのべて、「しか有る」「天下の大勢」と、「しか有るべき」「自由・進歩の信仰」

との區別をあくまでも忘れなかつた。

「余輩はしか有ることと、しか有るべきことを區別せざるべからず。余輩は固より世界の強国が其の領域の擴張に向つて熱衷しつゝあるを以て喜ぶべき現象なりとするものに非ず。現代的精神の権化たる独逸皇帝が……南亞米利加に、小亜細亞に、極東に、常に事端を起さんとしつゝあるを以て愉快なる現象なりとするものに非ず。さりながら余輩が之を愉快に感ずると不愉快に感ずるとは一問題にして而して大勢の然らざる能はざるは更に他の一問題なり。人は肥へたるがために夏を畏るものあり。然れども夏は肥へたる人の畏るるがために未だ嘗て其來ることを躊躇せざるなり」。

このように愛山の「帝國主義」があくまで國際的生存競争の場における、やむをえざる適應機制として考えられていたことは、表面的類似にもかかわらず、それを徳富蘇峰の「膨脹」の論理に基く「帝國主義」から區別することになる。蘇峰によれば、「開國進取」は「我邦建国以來の国是」であり、徳川時代に「収縮」せしめられていた日本國民の「膨脹力」は、日清戦争を契機として「軛を脱したる驥馬の如く、樊を出でたる猛鷲の如く」爆發していったのである。日本國民に元來内在していた膨脹のエネルギーが外に向つて發展していくという、いわばアニミズム的發想は、やがて「膨脹」の自己目的化に転化していく。もとより愛山も膨脹を説かなかつたわけではない。しかしたとえば愛山の「帝國主義」の具体的内容は「世界的政策を確立して列強の國家的營業に對抗し、軍備を充實して謂はれなき侵掠に備へ、併せて武裝的平和の世界に於ける發言權を維持し、國民の健康を照顧し、清醒にして多産なる家庭の幸福を盛んにして人口の増加を促し、斯くして進撃的態度を取らんのみ」というのであり、彼がくりかえし主張したのは次のような「獨立」のすすめであつた。

「総ての問題を國際間の合縦連衡に因つて決せんとするは自ら第二等国を以て居る者なり。他の強国に頼るに非

ずんば自国の運命を決する能はざる如き進退兩難の位置に大日本帝国を陥れんとするものは斯くの如き自信なき外交術のみ。寧ろ如かんや、国民の愛国心を頼み、国民の武力を頼み、世界の良心と人道とを頼むの外、何の恃む所なく、何の依る所なく、特立独行、……正直を以て政策とし、公明を以て標傲とし、恐るる所なく、憚る所なからんには。……余は大日本帝国が口舌の帝国、辭令の帝国、外交文書の帝国、陰謀の帝国、合縦連衡の帝国たることを望まずして、自己の武力を信じ、自己の正義を信ずる独立自由の国たることを希望するものなり⁽¹⁹⁾。

以上のことから明らかな如く、愛山の「帝国主義」においては、内在的エネルギーの「膨脹」の発想よりも、生存競争下の自己保存としての「独立」の発想が終始優先していた⁽²⁰⁾。しかも前述の如く彼は当時の国際関係を「戦国」にたとえ、「国民全体を武士として国の面目の爲めに戦はしむべき時節なり」とのべている。これを前にも引いた「昔の武士は一劍に仗りて天下を横行し、一身の面目を劍の影に防衛し、進んでも唯一劍、退いても唯一劍、自由も劍の光に輝き、独立も劍の下に保ちたり⁽²¹⁾。」という文と重ね合わせる時、そこに共通しているのは、正に武士的エトスに基いた「独立」と「抵抗」の精神——愛山の全思想を一貫した思想原理にはかならなかつた。その限りで彼の「帝国主義」は、その思想原理の根本的变化を意味するものでは決してなかつた。愛山の「帝国主義」への変説は、彼の思想原理にもかかわらずなされた変化というよりは、状況の変化に対してその思想原理ゆえに起つた変化である、ともいえるだろう。これに関連して愛山と蘇峰のちがいをもう一つ指摘しておく。蘇峰の場合「平民主義」から「帝国主義」への「変説」は、在野独立人の言論人から高等官二等正五位内務省勅任参事官への「変節」を伴い、勅任参事官を辞して後も『国民新聞』が政府御用新聞と化したことに変りはなかつた。それ故にたとえば田岡嶺雲によって「説を変ずるはよし、節を変ずるなかれ⁽²²⁾」と批判されたのである。しかし愛山の場合「変説」はあつたが「変節」はなかつた。彼は終始在野の言論人として自己を全うしたのであつた。

しかしこれまで我々が考察してきた愛山の国家観ないし国際観は、彼の思想原理との関係で、別に新たな問題を想起させる。彼は自らの「帝国主義」を宣言した論文の末尾に次のようにのべている。

「今や世界は其帝国的威力を以て我を圧迫せんとす。日本臣民に取りては是れ寧ろ自家の運命に対する弾力を驗し、自家の境遇に應ずる活力を試練すべきものに非ずや。甲州人と対戦したるが為めに三河武士の膽気を砥礪せし歴史上の事実を否定する能はざるものは、世界の恐怖すべき生存競争は却って日本人の将来を大ならしむべき一動機に過ぎざるを知らん」。

愛山の脳裏にあったのは、欧米帝国主義列強の圧迫をうけ「逆境」の只中にありながら、しかも自己の「独立」を守りその圧力に「抵抗」し、その「逆境」を逆手にとって跳躍台とし世界に雄飛せんとする、若い「けなげな」当時の日本帝国の姿であった。しかしそれは又、「賊軍の子」という「逆境」に生れ育ちながら、それを跳躍台として身を起した愛山自身の姿に、余りにも似ていてはならないか。とすれば愛山は正にその点で自己と日本帝国を同一化し、自らを日本帝国と化し日本帝国を自らの中に入れることによって「理解」しているわけである。だが我々は既に見た——愛山がそうした「転置」に基づく「理解」の方法を取る一方で、「隔離的精神」の必要性を強調したことを。しかるに「隔離的精神」を主張し、かつそれを時代や空間に対しては見事に実行してみせてくれた愛山も、遂に国家に対してだけは「隔離的精神」を持ち得なかつたのである。彼がその「独立」と「抵抗」の精神（及びその基礎にある武士的エトス）「士魂」をもっともよく学び継承したと思われる、福沢諭吉と真向から対立するのは、正にこの一点においてであった。福沢はいう、「立国は私なり、公に非ざるなり」²⁶。しかるに愛山においては正にその逆が主張される——「立国は虚栄に非ず」²⁶。福沢には人間が「区々たる人為の国」を立て「既に一国の名を成すときは人民はますます之に固着して自他の分を明にし、他国他政府に対しては恰も痛痒相感せざるが如くなるのみならず、陰陽表裏共に自家の

利益榮譽を主張して殆んど至らざる所なく、其これを主張することいよいよ盛なる者に附するに忠君愛国等の名を以てして、国民最上の美德と称する⁽²⁸⁾」ことを「不思議⁽²⁹⁾」とみる視点があり、それ故に「忠君愛国の文字は哲学流に解すれば純乎たる人類の私情⁽³⁰⁾」といい得たのであった。けれども愛山においては「国家の虚栄でないことは、既に定まつた事実である⁽³¹⁾」こと、「国家の存在は実在中の實在⁽³²⁾」であることが一方的に強調されているだけである。その意味で愛山は福沢的観点からいえば国家に対する「惑溺」から遂に脱し得なかつたといえよう。たしかに彼は「隔離的精神」を認めそれによって多くの「惑溺」から自由たり得たが、にもかかわらず国家への「惑溺」からは遂に自由ではなかつた。だが他方愛山におけるあらゆる「凝固」に「抵抗」する精神は、彼の国家への「惑溺」にもかかわらず、彼の国家像を「自由寛容の精神⁽³³⁾」にみちた生々としたものにしていたのである。その意味で福沢の啓蒙的「理性」における反「惑溺」の精神は、愛山のロマン的「心情」における反「凝固」の精神によってある程度までうけつがれ、代位され得たといつてよからう。ただこの反「凝固」の精神は遂に国家への「惑溺」を免かれなかつたのだが。「惑溺」と「凝固」はこうして明治思想史における一つの変化を象徴するのである。

(完)

- (1) 第四章の(三)、注(32)参照。
- (2)(3) 『第二十世紀の論(四)』『信毎』明三四・一・九。
- (4) 『国民之友』三六一、明三〇・九・一〇。『文集』所収。
- (5) 同前、『文集』三三四頁。
- (6) 同前、三三三頁。
- (7)(11) 『第二十世紀の論(五)』『信毎』明三四・一・一〇。
- (12) 「余が所謂帝國主義」『全集』三四〇頁。

- (13) 同前、三四五頁。
- (14) (17) 蘇峰「大日本膨脹論」『明治文学全集』三四、二四六頁。
- (18) 「余が所謂帝國主義」『全集』三四六頁。
- (19) 「外交術よりも兵力に」『國民新聞』明三三・八・一〇。
- (20) なおつけくわえれば、國際關係における規範意識という点では、愛山の場合「万国普通の公義と人情」への信仰が一貫しており、帝國主義の時代においても「武力は方便にして目的に非ず。最後の勝利は世界の生靈を愛惜する人情主義に在り」(「天下に定まらん」)『中央公論』大五・四)と信じていた。蘇峰においても「膨脹」の意識と共に日本の「使命」の意識があったが、結局両者は癒着してしまふ。
- (21) 「平和主義の是非」『信毎』明三四・四・七。
- (22) 「現代金権史」『全集』一三頁。
- (23) 田岡嶺雲「第二嶺雲搖曳」『明治文学全集』八三、所収、七五頁。
- (24) 「余が所謂帝國主義」『全集』三四七頁。
- (25) 福沢「瘠我慢の説」『福沢論吉全集』六、五五九頁。
- (26) 「世界の過去現在未来」三七二頁。
- (27) (30) 福沢「瘠我慢の説」前掲、五五九〜六〇頁。
- (31) 「世界の過去現在未来」三七三頁。
- (32) 同前、四七二頁。
- (33) 「大日本祖國の歌」『信毎』明三一・四・二九、『文集』三五一頁以下。